



誹諧寂禁

天

文
138
—

5
708
1



門 訓
號 708
卷 1

東京 芝罘 大久保
餘 丁 町 百 拾 貳 番 地
坪 内 雄 藏

東 山 山 上 卯 亥 俳 諧 寂 集 上

うきうきと推乃と白紙也

ふしと和と集と中 持巻八三

ふしと和と集と中 持巻八三

三十一

明治三十二年十一月五日
坪内雄藏氏寄贈

春秋菴白雄著 拙堂老人補

誹諧寂集 全三冊

江都 製本所 英文藏

明
細
赤

此後益々其の勢を盛んにす

るべし其の勢を盛んにす

可成り其の勢を盛んにす

此後益々其の勢を盛んにす

廿四日
廿五日
廿六日
廿七日

此後益々其の勢を盛んにす

可成り其の勢を盛んにす

此後益々其の勢を盛んにす

可成り其の勢を盛んにす

三

家業とゆふにふくむる病と
治るにふくむる病と又わく末
をふくむる病と心は病と
さう病と治る病と

じゆふと後の人と
么乃をいふらばう病と
方と後とさう病と
さう病と

何事此中... 論

事之還...

文化九年七月

富小路從二位刑部卿貞直卿

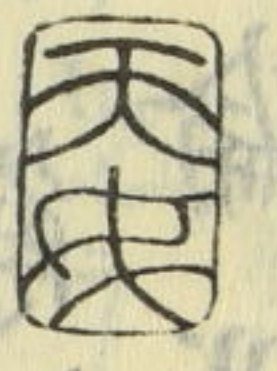
如波齋...

何れもさうみねもさうしつれとさもまを
 ころも白字、え〜〜ひちもある。寂寂も〜
 一葉をみるらんりのし〜著い〜
 い〜〜はもみぢえ〜〜を〜〜
 也〜〜此細記〜〜つ〜〜た〜
 ぬ〜〜ん〜〜
 ぬ〜〜ん〜〜
 ぬ〜〜ん〜〜
 ぬ〜〜ん〜〜
 ぬ〜〜ん〜〜

序

可解不可解之一語不啻我詩
 之論可以論俳諧歌也夫俳諧
 之為歌僅二十二字為一首言簡
 意深且哉其妙處在可解不可
 解之間焉白雄居士此撰解其
 可解不可解之妙至而得拙堂
 主人之增補其書初備美合茲

壬申之夏刻成以予之庶白雄氏
 有舊請題數言時新聞小園
 移花種竹日就園丁之事華觀
 撥者數旬聊書之以記姓名而已
 江戸詩人詩伴老人大産行
 序



凡例

- 一 此書安永選本寛政選本二品あり
 安永本ありて寛政本よりき文
 あり寛政本ありて安永本あり
 文あり今寛政本ありを参考と
 して安永本あり文を坊補するもの
 あり
- 一 章中より補とある以下を皆坊補也

此の凡例

文あり又之曲行の文めとくふのよとく
 補とあり一章平坊補でしめい三平をの
 よとよ補とありとみまの赤一二の坊補
 めと句よと補とあり四色句の坊補
 又章中よ補とありかく三平其のよ
 補いあせとも只昔坊のはあふん
 死の
 従来字をすめてけくあるちあをさ
 魚魯鳥馬馬の誤了もくぬのく

さきとも引出あると引出の元さす
 うのそ悉く改むとくあつとてん
 人ふ志とてぬ此のほくやぬ白よちうよ
 有明の月野の長明とあり今たれを
 兼好法師と改む解とみとてさへ
 くとみとてあふん祖翁とあつとて
 のまふのまふとみまのまふのまふ
 まく同
 一とて異の作のまふハ作者の志とてく

或人集よとあるも歌名とてふけり
あり

一 各書中の初見は祖籍の条をみると
西風の規矩とあり其の余の申す詞友
乃雅吟ありて流石とあり又其の
載と又鳥碎の条をみると載と
なり撰者白旗とありその世は今際補
形して白旗及び青子流友の条を
のきり亦白旗とあり一なるものせ

一 世の門ありのありとあり
その也故に篇尾よ

世一書に祖籍の遺緒をりやし
去来史の筆のありを流撮しける
る醉居士の夜話をあきと二巻と
あり道よありあり詞友の
あり他見をさかるとありあり
争いをのりふとあり一門の
かゆはとありよありとあり禽獣とあり

そのたけなす

かゝのたけなす諸あるもたけなすのたけなす
 其を公よせんとするたけなすを
 宛てて且増補を加へるを上梓と
 著し出よつて西風のたけなすのたけなす
 人あまのたけなすを予る罪も亦減却せん
 少年の人たけなすのたけなすある時をたけなす
 おもひたけなすをたけなすのたけなす
 の名をたけなす且年中のたけなす古き

古き人のたけなすもたけなすのたけなす
 あまのたけなすのたけなすもたけなす
 對してたけなすのたけなすもたけなす
 たり又老若のたけなすもたけなすのたけなす
 故にたけなすのたけなすもたけなすのたけなす
 たけなすのたけなすもたけなすのたけなす

拙堂老人稿

俳諧寂禁目録

上の巻

淡路の亀鑑
吹雪情の本
三の情の本
俗情の本
詞情新古の本
換骨の本
同業の本

俳諧寂禁目録

上の巻

淡路の亀鑑	一本
吹雪情の本	五丁ヲ
三の情の本	六丁ウ
俗情の本	八丁ヲ
詞情新古の本	九丁ヲ
換骨の本	十丁ウ
同業の本	十三丁ヲ

俳諧寂禁目録

一字の重なりよするを法源の事 卅丁ヲ

文字の重なり 卅丁ヲ

文字の重なりしてゐるの優をけしむ事 卅六丁ヲ

文字の重なりしてゐるの事 卅七丁ヲ

一句の繁事 卅七丁ヲ

歌題の重なり 卅八丁ヲ

句の事 卅九丁ヲ

火ともみふりあき事 卅九丁ヲ

漢語の重なり 卅九丁ヲ

和歌の言葉の重なり 卅九丁ヲ

古事古語古言古語 卅九丁ヲ

名所をけしむる法 卅九丁ヲ

名所をけしむる事 卅九丁ヲ

名所をけしむる事 卅九丁ヲ

名所をけしむる事 卅九丁ヲ

名所をけしむる事 卅九丁ヲ

名所をけしむる事 卅九丁ヲ

古今和歌集

けいふあまのこころのまじ

けいふあまのこころのまじ

廿九丁ウ

名流ふをまじと詞あつる

廿丁ウ

神祇

廿二丁ウ

釋教

廿三丁ウ

憲

同ウ

旅

同ウ

祝

廿四丁ウ

贈答

同ウ

錢別

廿五丁ウ

留別

廿六丁ウ

哀傷

同ウ

述懷

廿九丁ウ

懷舊

同ウ

画讚

卅丁ウ

發句の体

卅丁ウ

きこもこころのまじ

卅丁ウ

そまあやうある

同

ふくくまきくすふる

卅二丁ウ

ほろくかひるる

同

古今和歌集

三

龍子やうしたる

四十二ウ

出まあるる

同

おのきる

同

色きりてのる

四十二ウ

感懐あるる

同

観相

同

世類を對を觀お

同

多にあらざるる

四十四ウ

一作あるる

同

回文

四十五ウ

物の名

同

中の巻

同

服の事

二十一ウ

才三の事

六丁ウ

聯句他季うはりの事

九丁ウ

二句一意の事

十一丁ウ

おもひき乃事

十一丁ウ

名所りるる所る事

十四丁ウ

志まらるる所の事

十五丁ウ

大勢の中の人をさるる法

十六丁ウ

あ保き月の事

同

他の季の花短句の花揃乃る

十七丁ウ

こゝろの事

四

三十一

ロ

あけるの事 十九丁ウ

恋句の事 十八丁ウ

句々の事 十七丁ウ

聯る二るの同理屈乃事 十六丁ウ

聯る諸路のあつらひ 十五丁ウ

聯る自他の事 十四丁ウ

下乃卷

くはくはあふるの事

其一情の事 一丁ウ

廿二 理屈の事 同ウ

廿三 ことゝの事 二丁ウ

廿四 月のあはさるゝの事 三丁ウ

四 雨 四丁ウ

四 月 同ウ

四 風 五丁ウ

廿五 尚事かけあえ 七丁ウ

廿六 古時古語あはさるゝ 同ウ

廿七 文のあはさるゝ 八丁ウ

廿八 文のあはさるゝ 九丁ウ

廿九 見立るの事 十丁ウ

同ウ

廿十 見立るの事 同ウ

廿十一 文のあはさるゝ 十一丁ウ

廿十二 文のあはさるゝ 十二丁ウ

廿十三 文のあはさるゝ 十三丁ウ

廿十四 文のあはさるゝ 同ウ

五

才十五一の自他のり 十五丁ラ
才十六共くふ意せざるのり 十六丁ウ
禁句の事 十九丁ラ

不易流行の事 同ウ

負外

十五の哉のり 表一丁ラ

十五のや乃事 同九丁ラ

これ色おきる水をおのり 同十三丁ラ

目録終

俳諧寂琴卷之上

白雄坊選著



拙堂増補

古池や蛙飛こむ水の音 翁

道のもの木槿を馬り喰せりり

この二を蕉門の要後也つりてきりり

おとろひや蕪り喰あはし海苔の砂 翁

やこし死ぬるももんを掬のり

身来てもももんを掬のり一葉哉

古今和歌集

あのをとち稀はるをまらたより家 翁

此秋を何より年よりれをよりる

やもかきもなりくもやをの北尾花 八

四時の観相はゆき歯牙味ひて正風の
青紙志る

補

玄旨法平曰古奇と見たり先抄をえん
あゝ我義理をとりてさて義理ふあゝ
つらぬう紙をふ別まゝと色長 短
得失よあてられ教なるへ 紙帯も又
今毎に再三吟してあ義理よあて
あゝ古今人の一致あぬ紙帯も又
のり西風の音をゆき 只十七文

うしあてのこ解もろ紙うをよ
味とてこぬハ妙處まらか
をよ向くかかろは難をかま
捨るうも解 かのうもあ
あふあろあゝんといを
はてて味ある 我紙の上を
ふ志とらぬ其得力をい
たりり中まよまらへ

まきもやききこやうの月と梅 翁

ほろきよあはれ花をい

白を花もあはれとあふ秋の

初しらす猿も小蓑をほ

古今和歌集

上 二

西流しといふ人とあつりたるは是れ入り
がまやあなりと云ふて思ふは電燈し
まきなり

去来西風の大意を同

祖翁曰佛性よりく茶の物より惣して
ては自有りてとありて祖翁の言するは
茶の物をいふは茶をいふは
又曰佛性よりを悟むては西の領し
ては自他の観あるをいふをいふは
といふ草木の意よりいふは獸の意より
といふといふやとありて道の事とて思ふ
むといふはまきなりといひる念起らば
一よりいふはまきなりといひる念起らば
心より別風性の一也といふやといふは
亦親おはれりてとありてといふは
哀樂ともいふはまきなりといふは
嘆息といふはまきなりといふは

風情也俗よくては雅俗と
あそびあり

補

西風の佛性も茶古不易の句有りて
亦罪より不持をいふは志ありて
祖翁の亦延空と天和の流る異体も
亦多し異体と流る異体も
一時くろの瘧疾風の流る異体も
とも廢るるとの之仙化曰其角深して
後漸三年あるよりそ風をいふは
ありてと嘆息ありて去来曰流行の
句をいふは容衣おもふは等ふは
をいふは形容衣おもふは等ふは
また時くともありてとありて
西風より容衣おもふは等ふは
等ふは形容衣おもふは等ふは

上
三

かゝのこゝへてゐるの目も心も
さうして嘆きよゝ詩も各嗟咏嘆あり
歌の餘情あり純粋のうらふ十七言
はしと嘆きよゝの先づいふ
句くもゝゝゝゝをちゝゝゝの
すゝゝゝの二作と此をあるあり
題の文字のあゝゝゝ有見立ちを好む
有信平の俗よゝゝゝ有理を
とゝゝゝ有ゝゝゝの人を口かゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
口けゝゝゝ
吉哲曰あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
こゝゝゝ珠をゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
又曰よゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
くゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

半々そのくゝゝゝ對して自己のよゝゝ
さゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
出へゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
むゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
祖三羽曰人の旦暮あゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
りのゝ主一ゝゝゝゝゝゝゝゝ
三年不成の語をゝゝゝゝゝ

姿情の事

ひめゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
のちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
情をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
をいゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

如く前後の篇は由りてその時を
已ら心とお合する時を一つはむ
例の自らのたのしみとさく
^補のひあし己らとあ合する
時を一つはむとて他世の出来
事境をええさるゝとせんん得
る

あまををよきあはれを待たせ 翁

鹿のきよよ人の顔えり夕のゆ 一 髪

かぐのこゝろは情のあはれよか
さるをえりへ

^補 詩法要標云詩之義意不_レ一_レ要_レ其

歸不過情与景而已情兼景者上也
偏到者次之

偏到は情のこころは情に到りては是れ
此の風情のこころは又景のこころは
到りては是れ情の中寓情あり
又云惟情可以全篇言然苟無法注之
易入流俗故曰融情於景物之中托思
於風雲之表者難之
情を眼あはれえりては情のこころは
を風雲とらり

谷川や茶代茶々々秋の暮 益 青

今抄一竹の空ありゆの涼 柎 居

こころをて風情をえりては風情の

こころをて風情をえりては風情の

句々次の章子よゆりぬ

三の情の事

余情うほそり志くふなり一合乃
が―あももゆる人糸情の浅海よりき
ふぬりの通情をむるくこりぬを
き―やうは親つ朋友の情をさしつたる
まのあつたをあせつて女のあつたのりうき
あんとははきをむ情よあつたはとく
る―なり―情をあ―こりぬを巳のまの
情あ―せぬ人なうおをく―情をき―ぬ
海台若中―の末り出あ

補

情よ言かふあつたのまを―しん
―と―い―やあ―て―ま―い―い―い―か―い―
―の―海―い―と―い―と―い―と―い―と―い―と―

おもむきをりぬ

枯枝ふからよのやほきりくの秋の暮 公翁

寂―と―情―あ―ら―ま―い―

秋をまむあつたをぬあちしきぬ

さう―あ―い―い―け―て―ま―い―人―も―な―り―

寂―と―余情をふりぬ

海らかけそ流のたのそく流の形 元兆

よ―い―い―い―か―ら―ま―い―

さう―あ―い―い―け―て―ま―い―人―も―な―り―

さう―あ―い―い―け―て―ま―い―人―も―な―り―

源氏物語 余情をあらわす
野さしをゆる風を志むるに 翁

捨身掛命の行御をぬりいささゆい
時のむなりいささゆい 皆を懐ふし
きく人腸を断ふささるる

秋つまゝ七日のあめの明やきた 猿 錐
あつちめの湯はあやめ人鐘の音 鼠 弾
申くふるをこそおぬり秋の暮 肅 山
朝鳥の種ももく人乃ふらるる 和 及
こころの匂くあて通情を志むる

安をあらわす
やもを懐ふし 情を懐ふし 安情の論
世方を志むる

補

まてんをあらわす
きく人腸を断ふささるる
あつちめの湯はあやめ人鐘の音

補 俗情の事

俗情といふは
か面を釈迦孔をも奴僕のこと
思ふ形密をてはよまのせて人を
あつちめの湯はあやめ人鐘の音

たつと唐皮羊之みのりのはせとて
のく口ををりて言はずしとも終らぬ
俗情を吐かすものたつと

うらやまぬのいまる討擧のまゝ 越人

去来抄云蕉翁伊賀よりけりてを去来
曰らるるは俗情のいり一きりいり
とつあるはかきり風程こゝろありて
本情をあつてのりともあり
たつと通情ありとも俗情をきらみ

「吾の心を人に傳へるは
たつとあつてのりともあり

けりとも俗情のりありともあり

朝のつと通情のりありともあり

こゝろのりともありともあり

詩歌連俳ともお思ひを述るりのあり
けりともありともありともありともあり
こゝろ俗情をええとてのりともありともあり
ふありともありともありともありともあり
世のりともありともありともありともあり
得へりともありともありともありともあり
おめりともありともありともありともあり
あつて退りともありともありともありともあり
ある人ともありともありともありともあり
俗情を吐かすものたつと

補 詞情新古のり

古有言云情を以新為先詞以舊為可
用云

定家々曰須ハ三代集内出るもつと
能社も亦之を新らつとつと能
用してその能をあらつとつと能
を能うの或曰能社めを俗後平の能を
はつとつとも何れもつとつと能
俗後平の能を歌連歌よつとつと能
能をもはつとつと能を能つとつと能
あもつとつと能のつとつと能

賽浅

用意能のつとつと能乃能 去来

祖翁曰能の能とつと能たつと能

能も亦之を新らつとつと能
用してその能をあらつとつと能
を能うの或曰能社めを俗後平の能を
はつとつとも何れもつとつと能
俗後平の能を歌連歌よつとつと能
能をもはつとつと能を能つとつと能
あもつとつと能のつとつと能

能ハ能の能

能

能

ゆゑにすもくまてこえはめりしを
あふ又けしこゝめあはれもとら
あふつるさきくさきのゆきとみい
つめり紙巻のゆきのとらとそとのゆき
はりのあさるもみりつるこゝろ

換骨乃事補反替

補換骨とて詞同くしてうゑのからり
てあはれいづらり

あめい人の唇をきく秋の風 翁

言や草を喰ひし秋の風 許六

次子あはれなる人て唇の秋の風を
みて換骨を志す人

又

晴朝の歯くさし奥の店 翁

春かきて猿の歯をくさすの月 其角

其角曰け後反替して猫の歯をくさし
しもの海人の歯をくさしものあはれをくさす乃
一俵をくさす人あはれ等類の類をあはれ
あはれはくさす人の歯をくさす あはれさ
味いあはれをくさす

補

徐陵鴛鴦賦曰

山雞映水那相得 孤鸞照鏡不成雙

天下莫成長會合 無勝比翼兩鴛鴦

古今和歌集

十一

天下黄魯直題畫睡鴨曰
山雞照影空自愛 孤鸞舞鏡不成雙
天下真成長會合 兩鳥相倚睡秋江

又

鬢為愁先白 顏因酒慙紅 樂天
短髮愁催白 衰顏酒借紅 右山

こころを換骨の待たし

ほろこきよ晴つるからぬあふもま
まうあつめづの月そのころの夜

後徳寺志

有ぬの月とあふやほろこきよ
たむとまのけいもえい

宇治前大坂

こころを換骨あふもま歌あり

又

人の親のかゝるほろこきよ雀のみ 鬼貫
雀のほろこきよ人の親 大馬

こころを換骨あふもま侍

人の親の焼野の雀よあふりり 曉臺

是をた乃鬼貫るるこころを換骨
こころを換骨あふもま侍

補 同業の事

首の母のみのりて又せりなみ高 公翁
まよ牛意のまを又せり風乃杖 許六

去来曰同業のるあるを

桶の輪もきりて鳴かむ懐悴 昌房
石くえて舐噛やむ月あか 居行

こころのるまりのそらうらむらきこ
鳴かむもさる語は日なきた形定むを
けいふくもすてあてて物おしこのを
旧業とも又同業ともいひあはれりすま
ゆきむむりこころあはれ

まろくくふ身をい流き夕うぬ 宗次

けいふの自の自をまろくくするあめく
のけさぬりいひて口體をあらわす
出さるるまのこころを他よりえて別ふ
魂を入きて一ふくあはれりすま

人酔く較りくく人の身なるが 柴居

かくりの形容を同じるあう自他
のりちあてて自を天地懸隔形にい
同業反將の類をすぬるさうり

補 一字のまをいふく自を浅涼の事

徳翁曰一むりりり十七文字あり
一字のるるそらうらむらきこ
徳翁もまの自をあの一俵たのり
るるまをりの有るやうはるへいと

八十一
二二
一四

或集あり

りよそくも幸す初時る 翁

こま一句の意を解せざるをかく
入集せしものなきむくも幸す初時と
いつさる時と風雅の移るを失ふ

汐鏡の孤村し帰る秋の暮 保吉

或曰世々孤村あるといへるを解
きこまもあししりあはるるを解
さる人こゆれと下知をたす
秋の暮の寂く寂くするを換
ふり一ををも會せしめてる
空月澄かこそらいつたの
とこしいつめく胸中洒落

光風霽月の如く後の夕々ゆめあり
ゆめあり眼あり幽境古和清音あり
是一言のむさくもあはるるを
汐鏡よかゝるのさあさあさあ
一ををもたすもあはるるを
あししりあはるるを
あししりあはるるを
あししりあはるるを
あししりあはるるを

文字よあゆむは事

そそ風暴風して盪るをきく哉 翁

浦の英やまらぬ者の口は草 山 店

一有後海の波るかきりけりかなく海人の

山 店

山 店

「たゞもけさあはしのさむき井り」

吟ささるるくささるるあめり 風鈴の
うへの病こそ切さるるくささるる文
あまきささるるあさるるあめり

籠月や あやえ新や

月籠り 新やあやえ

かきりよささるる言ささるるあはれ
ふはよたささるるあさるるあめり
連歌と二三の字あめりささるる
二四の字あめりささるるあめり
ささるるあめりささるるあめり

補

二四の字あめりささるるあめり

ほをりく人を体むる月見哉 翁

望ましく意中ぬさるる曲の色 吞霞

二三の字あめりささるる

嘆ちちるひゆなまきの圃か 傘下

ちちるく酔のささるる夕 櫂 自槐

古人のきさるる二四の字あめりささるるあめり
あさるる語終あさるるあめりささるるあめり
下あめりささるるあめりささるるあめり

文字をあめりささるる句の優をほさるる

あさるるあめりささるるあめりささるるあめり

公羽

上の五文字をみりしる

よき山の花の本の間のを見えぬ 鳥酔

この詩とありて由意うらむこと一む
優なりとありてせしあのお話なり

志のぬこころ色ふ出ふりつらき
そのやけりひとくんとくみす侍

このころの文字はちりあはれぬ

補 文畧

命あまそそ春あひりて花のはせ山 白雄

けしよかお話なるはしとくしんも赤らんじ

命あまそそ春ありてのふらんのでの文字
めするの後よあまそそをよふ
まのし

文字はあまそそ向の意をよきくはくまふ

きぬこころてふお世せよや傍ら妻 公翁

きぬ野山あまそそ吟なり

みじの山の秋風も夜をよ

古くをよくをよく下しき

け歌をよく感へきふいふもきつたか
やをよくせしんやさきくこや
よふかみたり

まじりくも嵐のなまめしき 孫のぬ 山嵐雪

晴々たる光とありてそよ風のそよみありて
感傷ありてあつく思ふ懐懐の人の心
孫のぬと喚秋の吟あるよそよそ

くもくも降る雪ありてそよ風のそよみありて
このくもくも降る雪ありてそよ風のそよみありて
くもくもの吟ありてそよ風のそよみありて

一句の禁土幸ひおろるる

朝よそ風たを松島のかゝる 翁

松島行脚を思ひきりてあつて
風物の情懐中を思ひきりてあつて

まじりくも嵐のなまめしき 孫のぬ 山嵐雪

まじりくも嵐のなまめしき 孫のぬ 山嵐雪

載入へ換投のむらり
そよめより女部志の女とてふ言ふありて
鶯の鶯とてふ言ふありて
孫のぬと喚秋の吟あるよそよそ
はしりてそよ風のそよみありて
まじりくも嵐のなまめしき 孫のぬ 山嵐雪

歌題能踏題の事

補 歌題とて歌ありて能ありて能ありて
まじりくも嵐のなまめしき 孫のぬ 山嵐雪

五言 上

神垣やおもひのかきぞ涅槃像 翁

綿ぬきもや松風曲をけりて 野水

角触るなりたるも秋の唐紙 嵐雪

暁の流波をくもや念佛 其角

こころは絶世歌あり絶世歌のいのみを
洞中さしつゝのひり 幽玄よつゝのひり
落し入中さしつゝのひり

かろく來ぬ屋まつく乃梅折 翁

賢るもや解ふ筆書する極の先

ほととぎす岩中えて舟を禁ふ雨 曲翠

五月ふも 硯室あはれ 葉 椒 嵐雪

かろくゆきぬきそは 嵩や秋の風 杉 風

花鳥のたのび けいこ 攝衣 立 志

應くくつゆ たるも 去 来

いづま たり 花時あかき ぬ 湫田の橋 大 草

是等も歌歌なり 絶力はあきま
若くあへり かつゆ けいこ
絶世歌 絶世歌 絶世歌
絶世歌 絶世歌 絶世歌
絶世歌 絶世歌 絶世歌
絶世歌 絶世歌 絶世歌

八 上

付乃事

蝸牛角ふとつきよ須くぬる翁

補

世のつらさいことなるもよのこゝろ
もあまあり揚子の角のよき事といふ
固觸といふ玉ありてたゞいふ事い
たりする事壯ふりてんことけ偶言り
たりしそのたゞしむ

いづのちとききて野寺の鏡哉 工迪

補

雄畧天皇の清き野寺の鏡をてん
半くはせぬゆり野寺のつらさ
やうことの中や付ありてん

郊をむわいつは尾のほろの加茂翁 其角

補

うのちのつらさなるいかに
くゆきうをてん清女のつらさ
やうか後路のつらさなる郊のつらさ
をいふ人なり
軍書曰その結して古代のつらさを思ひ
あそぶなりかかふ人の名もと向中
あしむとつらさ西の對するかまのい
でめりあり

義仲のまほさめ山を秋也 公翁

補

こきひうち山を秋のつらさなり

補

祖着り景清も花見のつらさ七三
といふ向あまはつらさを延実天和の
流のつらさなり用ひてん
貞真のつらさ元禄のつらさ

吟よりかゝる通はゆめを半ふる白く
却る延まてくわの吹めら西余の白
赤きく多く何や

補火を由水子いふ事

清浦うゑ後かき燃ゆる火をいふ
いふあまといふふより火をいふ
いふえちういふその由いふ源氏お
おのそらういふあまの降は
いふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふ

控吟うとまけはかきし雑音の声 翁

かなうかおれをめらう葉の花 支考

是あを火をいふいふいふいふ
あまのいふあまのいふ

嘆うえていふいふいふいふ
あまのいふあまのいふ

これらも同じ類の事あり

白雄曰火をいふいふいふいふ
一情をいふいふいふいふいふ
あまのいふあまのいふいふ

漢語をけし事

馬より残る月遠し茶の糖 翁

小舟の中山の吟あり

杜鵑啼也湖名のさく濁る 文章

好ましくせうとりのあまをあらとて残る
湖名の歌は皆漢語にゆへに正風あり
落花生燭半深夜まよもはくあり

元日 灌佛 名月 蠟八 寒食

こまごとの歌のりをも漢語あり

補 蝶 葉

よれらるる古のり、和刻あまをさく
和歌者流もてハまきくし漢語め
和歌の絶世もやうりりち也る
形あり

名月也遊ぶふりくし七小町 翁

順禮よりうちたむるしゆ屋部 嵐雪

一角のうちよふらうさへも、登る人
あゝいそよふるし

和歌の言葉あをけく事

紙きぬのぬるもねん雨の花 翁

袖よりけさるるけ衣月いづり 素堂

先よりいよてく言あをさきて絶世
世のそらをもめて絶世とてゆへに
月けえくちの孫のちも狭きともあり
やもそらもまよもあをけく人
うらひ
そのねむひそくせうきれ ねてかく

和歌のなほあはれけしのまふあやむ
ふりつをましくこの日の下のみまふあはれ
なりゆきもあはれそわのほろりく
へうき

(補)

りやうりもほろくとほじ柿お葉 貞徳

ふきくつわ和歌のまふあはれけし
古の流りあはれそわのほろりく

朕や世をわい実の山かきき 春鳥

ふきくつわ和歌のまふあはれけし

古事一古語古歌古詩あはれけし白法

知足軒新居の賀

ふきくつわ和歌のまふあはれけし 翁

淮南子説林云

大厦成而奠雀相賀

さしつわ和歌のまふあはれけし

撰集抄云中勢元輔翁の哥二首
すしつわ和歌のまふあはれけし
このまふあはれけしのまふあはれけし
そわのほろりく
あはれけし

さしつわ和歌のまふあはれけし

あつちの日はさつちの秋の風 翁

明詩選

秋風吹持暮 古道行人稀
登此微陽色 射我霜中衣

石のしやる門あきそ夕と夜 牡年

源氏常其の美さ

あつちの川のしるしをさうのものを
あまへふそてししすのうらと云

しるしをさうの魚あり

春もつちやうの雀の顔はさ 一髪

清女枕草紙の
あつちの顔つさうのうらと云

昔海や羽白き鴨赤か 忠知

古伝日記

あつちのこのお糸をさうのうらと云
あつちのこのお糸をさうのうらと云
あつちのこのお糸をさうのうらと云
あつちのこのお糸をさうのうらと云

あつちの鳥のさうのうらと云 其角

古今集

あつちの鳥のさうのうらと云

かきまゝいふゆふ秋の夜の月

あつらひきやゆふあつらねの言 公卿

兼好法師のふり

あつらひたよふふさうあつらねの言
あつらひたつらねの月

かきまゝいふゆふあつらねの言
あつらひたつらねの月
あつらひたつらねの月
あつらひたつらねの月
あつらひたつらねの月

名新にまはくふ句法の事

ゆきまのふかきあつらねの言 公卿

下京やまはじく人のあつらね 凡兆

木舟寺ふまの會あつらねの言 其角

かきまゝいふゆふあつらねの言
あつらひたつらねの月
あつらひたつらねの月
あつらひたつらねの月
あつらひたつらねの月
あつらひたつらねの月
あつらひたつらねの月
あつらひたつらねの月
あつらひたつらねの月
あつらひたつらねの月
あつらひたつらねの月

名新をみのいひえとる本

ひまわりふ塚の庭を那うしむ哉 翁
吟りけりやふきの白ひの捨るの 岱水
ほりれもつ誠の友人を頼みてむ 素牛

くさくさくさあひあをせまらるるうらりり
所よまらるるまらるる名ふのうらるる
あを必あひあをまらるる相うらるる
古和の句くを考ふるふまらるる
てまらるる句をうらるるい
なり
古人曰ふ海をそのひとすらもまらるる
まらるるうらるる川のまらるるのまらるる
まらるるまらるるまらるるまらるるまらるる
まらるるまらるるまらるるまらるるまらるる

ひまわり近江の人とゆきまらるる 公羽

補 猿蓑集云望湖水惜春とてまらるる
あり或はまらるる送別とてまらるる
一時のまらるるまらるる後世の人を
感りてまらるる引のまらるるまらるる
まらるるまらるるまらるるまらるるまらるる
まらるるまらるるまらるるまらるるまらるる

五月のふきの浮きまらるるまらるる 公羽

と并まらるるのまらるるまらるるの月

仲夏をまらるるまらるるまらるる

あをまらるる綱代の氷魚を考ふる
まらるる

為時乃向く幻住庵の母のしる
みりへへー

名所不ふしるの句の事

三島のまの也あらめは古き佛蓮 公翁

朝々くより舟源も夕々ら 去来

むゆり路やいそよも入る時ぬ 舟泉

似合ふ野馬子のむくも須の里 丈草

あさひしそをいふるも吉路の
海津のむくもあやうくもいふる

補 祖翁曰名所の事をいふ

五人あをす其の長そのこと
すくもあ

又

高野山あ

父母の志をいふは 翁

角田川あ

いさのちとて 都を 貞室

鎌倉あ

眼よ青紫山は 初松魚 素堂

當六寺の曼陀羅をいふ

衣るる織らぬ 園女

又八島ありて

海人のあまのあまのいこむはなは 千箇

伏見の舟船

あんのうちよ一落かふる夜哉 路通

更ら保あて

はあなるや鬼ののりもひと源 雉舟

漸向あて

我弱の留あつてめ人橋乃重 湖春

是の筆もさききわたりあつてはるるを

あつてはるるあつてはるる也ききわたりあつてはるる
うり景あつてはるるあつてはるるあつてはるる
一法ありてはるる他の名あつてはるるあつてはるる
あつてはるるあつてはるる

名新ふのさき古歌或は古きを思ひ あつてはるる事

鯉あつてはるるあつてはるるあつてはるる 翁

増かすあつてはるるの大悟をみりいひてはるる
向あつてはるるあつてはるるあつてはるる
西行の涙を志すい増賀の信を感
あつてはるるあつてはるる

控え半しむるゆの邦の歌

あつてはるるあつてはるるあつてはるる

あつらひのついでに
あつらひのついでに
あつらひのついでに
あつらひのついでに

白川の園越る

夕の花をかきふ園の曠るは 曾良

古く冠をさきこひあそびをいふあり
あつらひのついでに

五條の橋のうらみ

橋さへあそぶ人切の歌 桂士

和歌の浦め

ふりかへておきよとては平持 鳥酔

和歌の浦めははらへては
さすはらへては

名新ののちをよそ 雑の句の事

から形へ杖突坂をたぐる哉 翁

光廣の紀り

くまをかきかちり通る旅人
くまをかきかちり通る旅人

是名新の雑の歌あり

和歌の浦め

和歌の浦め

和歌の浦め

ふらふらも軍あふ世にや一野山 夫考

ひきうりりみちの難のうけ出らん
あまきうらる中一は美りそこむる秋
あま向中はさひし自然に秋たうら
かりしりてさしむこのまてこむるゆめ
あまきうらる中一は美りそこむる秋

補 一とあつて句の意を添くするにや

はらうららふたうらふらふら
あまきうらる中一は美りそこむる秋
あま向中はさひし自然に秋たうら

あまきうらる中一は美りそこむる秋 公利

あまきうらる中一は美りそこむる秋

文君の仇きも酔のすね
あまきうらる中一は美りそこむる秋

酒の酔り秋のききよあまのむ 惟然

あまきうらる中一は美りそこむる秋

ちねとねのいあまきうらる中一は美りそこむる秋 越人

去来田圃粟の一体の句とていひあ
あまきうらる中一は美りそこむる秋
あま向中はさひし自然に秋たうら
かりしりてさしむこのまてこむるゆめ
あまきうらる中一は美りそこむる秋

あまきうらる中一は美りそこむる秋

教子酒をさうる人おもむく月 白雄

こころのこころをさうる人おもむく月

あきの橋をさうる人おもむく月

あきの橋をさうる人おもむく月

あきの橋をさうる人おもむく月
あきの橋をさうる人おもむく月
あきの橋をさうる人おもむく月
あきの橋をさうる人おもむく月

補 名新よのそとて 洞る乃集

崑崙をさうる人おもむく月
あきの橋をさうる人おもむく月
あきの橋をさうる人おもむく月
あきの橋をさうる人おもむく月

あきの橋をさうる人おもむく月 公羽

山中の温泉をさうる人おもむく月

白中をさうる人おもむく月
あきの橋をさうる人おもむく月

ちんさく酒よめを伐るる
東よめを院くの鐘の色
るるの底よここ入寒空
繡石のつみ白くさひせ

高直の城の空をよこしけし山

其角

くしき山の吹あり

救世大士を母のこをその
勾欄を著るるかかしの寛
形るるのぬをそののむむり
山みろりの風をそのの時の
梵を著るるのこをそのの
かかしてつるるの書中快
を母のこをそののこをその
形るるのぬをそののむむり

ゆきをそのの吹あり
不保の地なるこをその

新樹のく大親まののこをその

白雄

初瀬の吟たのま

初瀬の吟たのまの細き許六の風俗文選
を著るるの吹ありのこをそのの
虚よめをそのの吹ありのこをそのの
ゆきをそのの吹ありのこをそのの
中の俗言鄙言の文をそののこをそのの
初瀬の吟たのまの吹ありのこをそのの
又よめをそのの吹ありのこをそのの
初瀬の吟たのまの吹ありのこをそのの
を著るるの吹ありのこをそのの

神祇

ふらうとらの皆中もいぬは遷宮 翁

梅うも湯その物の方のまき 丈草

昔の海苔も和光の鹿の毛もい 許六

他流よつくま五音連声等のも風
子よ細さういふはさうをさう
るーたさう

森清ー死ぬまき

梅うも湯も今ぬま

おくの類い神祇ま納のまうらう

罪思善行の吟皆けら後ゆなり
ま納よあうらうお神祇まをまは

釋教

親まの曲丸えかうり花の雲 公羽

おあはしもむのうもは山哉 般亦貞

法然上人五百奉 忌 文圃

以て代まや一物の法のみ 露沾

ま納よあうらうお神祇まをまは
けさうをさうをさうの釈教
の句よ其の用たり

八巻
七
三三

意

紅梅也えぬ急けく玉簾 月

秋ひとて吹く推とろきて森ぬ夜 荷分

虫居の月よとら枕ももつ哉 文洞

あつたのほとくはあふさく
秋のちと歌詠あつたて
自のおもゆるえと繼社よ申なり
細くさしおふあつたてさくさくさくさく
何とらあつたて

旅

舟より脱てじろふ有らぬ更衣 翁

草はゆくらそ母とら人時回む 山川

その藪ふ推とらありてあつたて 文草

旅中のちとあつたてさくさくさくさく
とととちとをさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさくさく

祝

先程人梅を人のさくさくさく 公羽

駒を禱願せし人

時よは肥ゆる馬を秋まじり 酒堂

其の角が新宅め

世もかきよむにさくさくさくの月 涼菟

酒の旬日きく自他親疎をこころす

贈答

醫師公うらりやめて

糸桐くいつきの花をさうら

婿の嫁落柿よこ二合

夏葛地もくさや麻のよをこころ

夏之極ふ柳のよ初雪も名新哉

縁のりてまゝくははら

助 豊

曾良

允兆

公羽

山川

けしんをこころ親中を風呂あそ

助 豊

鶴眠るまゝ未だくもやそ新瓶

言 水

葦舎くち翁を中く

おのろふ松さくり人を月夜

土 芳

うらむちりくつ時を柳の尾

斜 影

中おさくふ翁を舟也夜を忘世中

如 行

或人よ同く

けあけえさるりのほし炭ふく魚

木 因

酒の旬日きく

上

三

山嵐雪 公翁 由之

かみくみの日暮をりてなを
君らんよふふいりて草の挿 嵐雪

つるさの白を自他親跡を
公翁

饑別

嶽のふふくもを流田の裏 公翁

公相根の首途をゆるる 由之

公相根の首途をゆるる 由之

雲を巻やまきしゆもぬしる 野坡

綾糸の白自他親跡をワキナシる

留別

川崎あそくまつら

まの種をちうふはむ別をい 公翁

さあそくまつら

思ひまらう都の秋をくさる日た 素心堂

途中あそく別をさる日

素心堂

行くくまきりしきりなすもよみ秋の京 曾良

留別の句む自他我縁をいささか入へ

哀傷

門人嵐南の此すうも

秋風の折るかめしき幸ぬの杖 翁

其の角々母をうしるひ

郊のむよそく形さ宿をすん中し

其の翁のこころをいささか入へ

ゆるもよなすいふさのぬみさの菴 槐市

あつたや膝をかへてみよみま 野坡

翁の送母

浦子がいふまにかさや枯尾屯 其角

翁の文海のこころをいささか入へ

其の翁のこころをいささか入へ

あつたよこさるおの恨うれ 北枝

母をうしるひ

身ごとくしなひて 其角

妻あつてこゝろのつらさ

水も月の相のひびきをうたふ

野水

あつてあつてあつて

水も月の相のひびきをうたふ

落梧

あつてあつてあつて

水も月の相のひびきをうたふ

尚白

あつてあつてあつて

水も月の相のひびきをうたふ

去来

あつてあつてあつて

水も月の相のひびきをうたふ

あつてあつてあつて

水も月の相のひびきをうたふ

史邦

あつてあつてあつて

水も月の相のひびきをうたふ

鬼貫

追悼

水も月の相のひびきをうたふ

あつてあつてあつて

水も月の相のひびきをうたふ

許六

こいさき

母の年一回

花よりけりけり花よりけり

其角

なたる工齋三之圃

二人の奔ふさくともあふの風

痛のこたふひいおけり
お見せさる恨もつゆも
まよひのこ

あゝぬ人の志く借いしをさるる下

元翠

哀傷の句む自他親疎を日ごとく
親縁善戚を別別哀傷とててん

對しつみ句りたるそく句以ひつらり
まおあまをた

たつて代も涙あめ春乃鶯
かゝつみとたつて西よこそ人をたつて

鶯ともおも涙あめよちの風
あゝつみとたつて西よこそ人をたつて

あゝ別たつてこれ蕉門のやいおのり
あゝ通とたつて

述懐

あゝあもてぬ旅年の果や秋の會 菊

あゝあもてぬ旅年の果や秋の會 八橋

こいさき

上

三九

葉かきこころんも朝魚の浮世の 野坡

懐舊

高館の古戦場あり

夏草や兵やもろそ夏の流 三流

扇の経多の一室のあそび

よこを竹小鍋洗ひし流やこれ 曲翠

母を夢よりうそく

昔のまをゆじいそりの乳房が 風洗

画讚

骸骨の画

稻はまや秋のやま流るるの穂 翁

源氏の画

傘持の月よみくもくはあこの柳 其角

花女の繪

よのかく紙をみてゐるを園の月 鬼貫

布袋の画

大虚流し禪師の指のさし所 其角

大泉 人麿の繪子

月夜の鏡なるまりの海とて人 才磨

儼ハ地の白りつゝるる

あゝのともくわんわん

其角を白く何うし 什集よ東坡の鏡
あせり白のるあていつて幾らうら
笠重呉天雪とつる語を反轉の
句ありては角のうらわらつて幾ら
あゝ

又かゝりの 儼り
あのかゝりわ葦の裾のわかしが
あゝのまをよめるそのうらあのかゝりあを

つらきやうなりけりあゝの儼なる
あゝとて是れ蕉門の舟さうり詩ハ有聲の
出画とて聲の待りたり古人のあゝ
あり故よ儼るをこゝ画の餘情をいふ
ことなり

音浪やち波ゆるゆる春の色 素堂

あゝのまをよめるもねとく 琴の草花 公翁

あゝかゝぬ桐のひとあや 筆の赤 其角

琴の草花 筆の赤 其角
あゝのまをよめるもねとく 琴の草花
あゝかゝぬ桐のひとあや 筆の赤

補 或人松よ鳥のよるに画よ秋
のまのまをよめるをいひるの昂魚

名月や夢のうへに松のかげ

其角

名月の夢のうへに松のかげ

名月の夢のうへに松のかげ

名月の夢のうへに松のかげ

公羽

名月の夢のうへに松のかげ

去来

名月の夢のうへに松のかげ

沾蓬

名月の夢のうへに松のかげ

名月の夢のうへに松のかげ

公羽

名月の夢のうへに松のかげ

其角

名月の夢のうへに松のかげ

桃賀

名月の夢のうへに松のかげ

名月の夢のうへに松のかげ

翁

名月の夢のうへに松のかげ

去来

名月の夢のうへに松のかげ

杉風

名月の夢のうへに松のかげ

名月の夢のうへに松のかげ

公羽

名月の夢のうへに松のかげ

露沾

名月の夢のうへに松のかげ

文華

艶々ふりた句

ぬきてひくくもぬしわぶの秋

翁

蜀魄おんをたると夜はきを

菊齡

都らあわひとあつくよるさあ

支考

幽玄なる句

ゆの木の葉ともあつくま白ひる

翁

あつして郊のむはむはひる

山川

名月也新と寺のあふある

胃房

あつくさる

初生の葉たてあつく人輪あせん

公翁

あつく花たつる人乃長刀

去来

黄龍也二非五合の最年首

曲翠

色もあつる

卯のむやうふ柳のあつひはし

公翁

身あつひもあつ向の雑多の緑の

轍士

あつく流やあつけく揺り下り

塵生

感情なる句

酒のあついとあつくあつあつ

公翁

いし番おけけ掃のまふとぬふたりのおりの
ほしくわと縁をもてる秋の扇小春

観相

高の紫の表え勢きり今秋の表
えともむらうを相お
候とたぐ地をさうふさうの表也
越人

舟をうけてをそおしくお
矢の下より舟の乳をのむ鹿のまが
公翁
志

炉をえくふ命はほほほ措の儀 似昔

春のおお梅よゆき志すいりの 翁

較とく難ふ舞の浮揚かふ也 其角

おのりて常の朝とふくふ亮 不角

又

灌仏の日お志はさよふ麻のよび 翁

虫ありや猫の爪く周果経 西吟

盗人の後なくちのちか 菜山

さしきり

四〇

入又 又

子くまのこや 公羽

たらしきうや 鷺水

かきくぬの 許六

又 又

艦の 公羽

ふの地 素堂

るぬら 場水

一作ある句

床より 翁

馬志る 曲翠

とえき 荷分

くまのこやの句くまを侍 悉くワ、ウヤ
ウヤも皆ありしめさるあまーうさたり
昔人曰一律しあまよるさてあまー
りのくまのこやをさるあまよるさてあまー
あまよるさてあまよるさてあまよるさてあまー
句くまのこやをさるあまよるさてあまよるさてあまー

回文

さしきり

四

四七

はらの木のきりやまきむ朝のけむり 卜宅
おしげ波白くまなほけいしれ 氷花

物の名

精 精 膏 結 齋 答 答 答 時 居
うけらるる時貝きりしむかき 菊峰

鴨 かみ をね 乳 八 水 淀
鴨 をね 乳 八 水 淀 立吟

田文物の名好くしてさるめらあはれ
かくのこころあふあふいせふふふのあふ
あふふふふふふふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふふふふふふふ

能諧寂琴卷之上 終

...

拾遺集卷之五
五

拾遺集卷之五

物類

物類

物類

物類

物類

物類

